

## うめにうくひす

こまつ ひでお

平安時代のウグイスは、日本語でなんと鳴いていたのであろうか？『古今和歌集』の物名歌の一つにその聞き取りの例を求め、それについての具体的な検討の過程をつうじて、和歌表現を解析する方法の、そのありかたに関して、いろいろと考えてみたい。

### 0.

はじめに、この小論の主要なねらいを略述し、あわせて、蛇行的ともいうべき論述形式を、あえてここに選択しようとするということについて、釈明しておくことにする。

『古今和歌集』の物名歌から、まず、「うめ」を隠題とする1首を取り上げ、和語を支配する語音排列則（phonotactics）の制約に着目することによって、この特定の仮名連鎖が、どうして物名歌の隠題にふさわしいものとして選ばれているのか、その理由を言語の面から明らかにする。つぎに、その検討から得られた帰結を踏まえて、「うくひす」を隠題とする1首について、物名歌としての表現技巧を解析する。「うめ に うくひす」という標題は、これら二つの語の仮名表記によって、この小論の主題を象徴的に表明しようというつもりからの命名であるが、結果的にみると、全体の内容のごく一部、ないし、その一面しか表わしていない。

この小論の中心的なねらいは、解釈の過程において踏まれるいちいちの具体的な手順を通じて、その背後にある筆者なりの方法、あるいは、解釈の指導原理とでもいうべきものを、含意的に提示しようとするところにある。そういうねらいから出ているために、小論の主体をなすところの、第6節以下における「うくひす」の和歌の解釈過程においては、論述が著しく煩雑多岐にわたるだけでなく、当面の主題にとって枝葉末節、あるいは、極端な逸脱ともみえかねないような事柄にまで論及することになるので、迂余曲折の誹りを免れがたい

であろうが、それらは、すべて、究極的な目的と密接な関わりを持っているというのが小論の筆者の立場であり、また、あえていうならば、遠まきにして迫る代償としての副次的な収穫もないわけではない。小論の全体を支える方法の有効性と、そういう方法によって到達しうる解釈の限界とは、導き出された解釈の妥当性、ないし、その信憑性の度合によって正当に査定されるはずだと考える。

なお、以下に引用する『古今和歌集』の本文は、藤原定家自筆の伊達本（複製）に原則として依拠するが、この小論においては、第17節に指摘する理由から、もっぱら、草仮名のみによるその原初的表記の段階に還元して考察することになるので、標題と直接に関わりを持つ二つの和歌は、すべてを仮名表記にもどしたうえで各句を機械的に切り離し、また、例証や傍証などのために引用する和歌や詞書などは、それぞれの引用の目的に合わせて、適宜、読み取りやすい表記に書き改めて示すことにする。

## 1.

『古今和歌集』の巻第10は、47首の物名歌をもって構成されており、それらの隠題は右表に示すとおりの順序に排列されている。ほかに、巻第20のあとに「墨滅歌」としてあげられているものがあるので、参考のため、その数を右端の欄に示しておく。

鳥名	2	
虫名	2	+1
植物名	30	+2
地名	8	+2
雑	5	

この巻は、「うくひす」に始まり、ついで「ほととぎす」、そして「うつせみ」を詠みこんだ2首の贈答歌があって、そのあとに植物名を隠題とする30首（ほかに、墨滅歌2首）が続いているが、物名歌の中心をなすともいべき植物名の、その最初に置かれているのがつぎの和歌である。

うめ 詠人しらず  
あなうめに つねなるへくも みえぬかな こひしかるへき

かはにほひつつ [426]

これ以下には、「かにはさくら」「すもものはな」「たちはな」といった隠題が並べられているが、それらの大部分は、通常、和歌の題材として詠まれることのないものや、2種、3種、ないし4種の短い語形の植物名を、与えられたとおりの順序で1首のなかに詠みこんだもの、あるいは、「を・み・な・へ・

し」という五つの仮名を各句の最初に配したものなど、いわば、ひと癖あるものによって占められているとあってよい。地名についてもまた同様である。そういう中であって、「うめ」という隠題は、あまりにもすなおにすぎるようにみえる。この疑問が小論の問題のそもそもの発端である。

ウメは春の訪れを告げる花として、好んで和歌の題材とされているし、また、この場合、意味を捨象して詠みこまれるべき「うめ」という仮名連鎖は、隠題として最小限の2字にすぎず、これなら、わざわざ意図的に詠みこむまでもなく、それと同じ仮名連鎖を含んだ和歌が、偶然にいくらでもできてしまうのではないか、現に、この歌集の中にもそういう実例が容易に見いだせるのではないか、とさえ思われるほどである。もしそうだとしたら、作者としての努力は、ウメに縁づけた、内容のすぐれた和歌を、さまざまな表現技巧を駆使して作りあげることに注がれるのが当然であろう。ところが、ここにあげられている和歌は、秀作と呼びにくいどころか、むしろ、そのままには意味のとおりにくいような奇妙なものである。第1句に隠題の「うめ」が詠みこまれていることは疑いないにしても、「あなうめに」とは、はたして、どういう意味に理解すべきなのであろうか。この部分の解釈が確定できないと、和歌全体の意図するところも、はっきりしない。

韻文と散文との別を問わず、所与の部分の解釈が定かでない場合には——あるいは、定かであるようにみえる場合においてさえも——、まず、先行する注釈書を博搜して参看するのが、いわば、この道における定石、ないし正統の手順とされており、その手順を踏まないことは、怠慢と目される風潮さえあるかのように見うけられる。しかし、この小論においては、あえて既成の諸注釈に依拠することなく、まず、筆者自身による解釈から始めてみることにしたい。上記のような定石とちょうど逆に、みずから考える限界まで解釈を詰めてみたらうで、はじめて諸注釈をひもどくのが——もし、それをしも方法という名をもって呼びうるとしたら——、こういう場合における、小論の筆者の一貫した方法であり、その当否を問うことが、この小論を執筆してみようと考えた直接の動機でもある。すくなくとも、この「うめ」の和歌や、それに続いて取り上げる「うくひす」の和歌などのような場合に関する限り、そういう方法によって読みなおしてみなければ、ほんとうには読み味わえないことが、第17節において、決定的に明らかになるであろう。なお、それは、以下における検討の結果として導かれるであろうところの帰結が、従来の解釈と、部分的に、あるいは、ほとんど全面的に、一致するか否かとは、まったく無関係である。

物名歌は、所詮、ことばの遊びである。しかし、それは、遊びにしかすぎないという意味ではありえない。そういう基本的な問題に関して詳しく論じる余裕がここにはないが、ひとつの言いかたをするならば、この歌集に収録されている和歌の、そのすべてが、なんらかの形においてことばの遊びであり、その遊びの精神が、物名歌において、いわば、もっとも直截かつ集約的に顕現されているということである。したがって、これらの和歌の場合には、ことばの遊びの、遊びとしての洗練度が、評価の軌準として厳しく問われていないはずはないと考えるべきであろう。

教条的文学史家なら、この「うめ」の和歌を稚拙な出来ばえの物名歌とみなし、その稚拙さのよって来たる当然の理由を——そして、おそらく、「うめ」という極端に平易な隠題が選択されている理由までも含めて——、この和歌が「詠人しらず」の時期の成立であるという事実を求めるかもしれない。しかし、稚拙さをかりに素朴さという、多少とも美化された表現に置き置えてみたところで、そのような理由づけによる合法化は、あまりにも安易といわざるをえないであろう。この和歌が、最初の勅撰集に、厳選の過程を経たうえで採録されている以上、すくなくとも撰者たちの規矩にてらして、これが凡作であったとは考えられない。そういう観点から——すなわち、『古今和歌集』に凡作なし」という作業仮説を設定して——、この和歌のどういうところが撰者たちに高く評価されたのかを考えてみるのが正しい筋道であろう。そうだとしたら、どこかに、まだ、われわれの考え及んでいない、なんらかの非凡さが隠されているに相違ない。

## 2.

「うめ」という、僅か2字だけの仮名連鎖にすぎないから、偶然に、いくらでもできてしまうであろう、という程度の見とおしのもとに捜してみても、この歌集の中に、そういう事例は容易に見いだすことができず、結局、匙を投げざるをえなくなる。そういう予想外の結果を踏まえて、あらためて理由を考えてみるならば、最初の見通しに重大な誤りがあったことを——すなわち、音韻論的な洞察に欠けていた事実を——、思い知らされざるをえない。理論的にいって、「うめ」というこの特定の仮名連鎖は、和語によって綴られる文の中に——ことに、和歌の場合には極端に——、生じにくかったはずだからである。どの仮名どうしても、また、どのような順序でも、自由に結び付くことができたわけではなく、相性による本来的な制約があったからである。

隠題として「うめ」を与えられた——あるいは、みずからにそれを課して、作ってみようと試みた——この作者の立場に立って考えてみるならば、「うめ」という仮名連鎖を詠みこむことが、いかに困難な課題であったかがよく分かる。かれにとって唯一かつ最大の難関は、「うめ」の「う」の仮名をどういう工夫によって処理できるかというところにあったはずである。

どのような音素目録 (inventory of phonemes) があり、それらの項を相互にどのように組み合わせて運用するかは、個々の言語ごとに独自である。当時の日本語についていえば、和語と借用語との間に特徴的な相違が存在した。和語を支配する語音排列則が、原則として、母音の相互連接を許容しなかったという事実は、特に重要である。口頭語のレベルにおいて、すでに一般化していた音便形は——いまの場合、ウ音便が直接の関わりを持つわけであるが——、和歌の洗練された用語から排除されていたし、漢語の使用も和歌としては反則になる。さらに決定的な障害となったのは、あとで触れるように、「う」の仮名が——ということは、すなわち、それによって代表される音節が——、本来、語頭において「め」の直前に立ちえないという制約のあったことである。つまり、ところ、「う」の仮名として和歌に詠みこむことが可能なのは、1音節語の「う」だけであった。しかも、それだけにとどまらず、和歌の内容をウメに関連づけなければならぬという厳しい条件まで加わっていたのである。

つぎの和歌は、この歌集において、物名歌の中に分類されているわけではないが、第3句の言いまわしがやや不自然に感じられるのは、その部分に「さくら」という仮名連鎖を意図的に詠みこんでいるためである。この和歌の表現上の工夫は、まさにそこにあったと認めるべきであろう。

桜の花のもとにて 年の老いぬることを嘆きて詠める 友則

色も香も同じ昔に咲くらめど 年経る人ぞあらたまりける [春上・57]

ところが、中には、たとえばつぎの和歌のように、「さくら」という仮名連鎖を含んでいても、はたして、意図的なか偶然なのか、判断に窮するものもある。

卯月に咲ける桜を見て詠める

紀 利貞

あはれてふ言とをあまたにやらじとや 春におくれてひとり咲くらむ

[夏・136]

咲いているのがサクラであることは詞書から明らかであるが、第5句の「さくら」という仮名連鎖が意図的に詠みこまれていると断定するには、全体のことばの流れがあまりに滑らかにすぎようでもある。ただし、詞書から切り離

してこの和歌を解釈しようとするならば、第5句の「さくら」が決定的な鍵になりうるであろう。

特定の仮名連鎖が詠みこまれていさえすれば、ただそれだけで無条件に物名歌として分類されているとは限らない。それは、「さくらめど」の和歌の例だけをもってしても明らかである。一例をあげれば、つぎの和歌は、『古今和歌集』では恋歌として、また、『拾遺和歌集』では、「ひぐらし」を隠題とする物名歌として分類されている。

いま来むと言ひて別れしあしたより 思ひくらしの音をのみぞなく

[恋 5・771]

「ひぐらし」を詠みこんでいても、和歌それ自体の主題は恋であるから、というのが前者の分類原理なのであろう。

こういう例が出てくるところをみると、この「うめ」の和歌なども、実は、和歌に頻用されるなじみの深い語を詠みこんで1首をものしてみようという程度の気軽さで取り組んでみたところ、思いもかけぬ難物で、手こずったあげくに、あまりよく意味のとおらない「あなうめに」などという言いかたでお茶を濁してしまったのではないかということで説明がつきそうにみえる。しかし、そういう単純な考えかたは警戒した方がよい。

和語の語音排列則などについて、平安時代の人たちが知っていたはずはないと考えたとしたら、それは明らかに誤りである。反省的に、そして系統的にそれをとらえていなくても、ある種の仮名連鎖が極めて詠みこみにくいという事実は、実作の経験を通じて、当時のうたびとたちの共通理解になっていたはずとみてよい。たとえば、現在、「ん」で終わる語で尻取のあとを続けられないことは、幼児でも知っているようなものである。いささか誇張しているならば、「うめ」を隠題として選んだこと自体が、最初から不可能への挑戦のようなものだったのであり、したがって、まがりなりにも——という表現が適切であるかどうか、その出来ばえについての評価はあとにまわすことにして、ともかく——、それを詠みこむことに成功していると認められたからこそ、ここに選ばれているのだと考えるべきであろう。換言するならば、隠題が「さくら」では、どれほど巧みに詠みこまれたとしても、物名歌としてその技巧を評価するわけにいかなかったということである。上にあげた「ひぐらし」の和歌が二つの勅撰集で部立を異にしている事実は、その意味において興味ふかい問題を提供している。ちなみに、つぎの和歌ぐらいの工夫があれば、『拾遺和歌集』では、「さくら」でも隠題として認められている。

花の色をあらはに愛<sup>あ</sup>でばあだめきぬ いざ暗闇になりてかざさむ

[物名・359]

### 3.

ところで、とにもかくにも、語音排列則の制約を乗り越えて作られたこの「うめ」の和歌は、全体としてどういう意味になるのであろうか。

われわれは、過去の文献にみえる表現の意味内容が理解できない場合、その難解さの理由として、われわれが当時の言語に十分に習熟していないためであるとか、当時の社会に生きていないためであるとかいうことをすぐに考えてしまいがちであるが、必ずしもつねにそうとばかりは言いきれない。『古今和歌集』の和歌が難解であると感じられる場合、その難解さが1000余年の歳月の隔りに起因している、ただちに考えるのは誤りである。それらは、同時代人びとにとっても、じっくりと解きほぐさなければ理解できないような、練りあげられた表現になっているものが少なくないからである。この「うめ」の和歌をもって、まさにその典型的な例の一つであるとはいにくいにしても、やはり、これもまたそういった和歌の類型に属することは確かであり、したがって、平安時代の人たちなら、一読しただけですべてを了解できるといったものではなかったはずである。こういう基本的な問題について、実例をあげながら詳しく論じる余裕がないが、さしあたり、この和歌だけに絞って解釈を試みることにしよう。

平安時代のことばについてひととおりの知識をそなえていれば、この歌集の中のどの和歌をとっても、その第1句の意味が、下まで読まなければ見当がつかないというようなものは、まず、ないといってよいであろう。そのほとんど唯一の例外がこの「うめ」の和歌であって、「あなうめに」だけでは、いったいどういうつもりなのか、ほとんど推測のしようがない。「穴<sup>あな</sup>埋めに」という引き当ても考えられないではないが、およそ和歌に似つかわしくない表現内容なので、それは自動的に排除されるであろう。したがって、この和歌の場合には、第1句についての解釈を保留したままで、その先に進まざるをえないことになる。

第2句以下は、「常なるべくも見えぬかな、恋しかるべき香は匂ひつつ」と読める。<いつまでも現在と同じ状態でありつつけるはずのものとも見えないことよ（散った）あとになって懐しく思い出されるに相違ないそのよい香りは漂わせていながらも——>といったところであらうか。この部分の解釈をはじ

めに固めたるうで、もう一度、第1句の意味するところについて考えてみるという手順を踏まなければ、この和歌は、平安時代の人びとにとっても理解できなかったであろう。

第3句の「見えぬかな」は、「あなうめに」の「めに」が「目に」であることを示唆している。句の切りかたは不自然であるが、要するに、「目に/見えぬかな」ということである。いま、そういう解釈の線を追うとしたら、残された「あなう」の「う」は、語音排列則のうえからいって——というより、当時の人たちの立場からすれば、母語についての直覚に基づく反射的選別として——、1音節語でしかありえない。当時の日本語にいくつかの「う」はあったが、結局、この文脈において引き当てが可能なのは、形容詞「憂し」の語幹用法としての「憂」だけであるから、「あな」は感動詞であり、結局、「あな憂」ということで結着がつく。この和歌は「悲しいかな！」という慨嘆のことばで始まっているのである。

「あな憂」という言いかたは、平安時代の語法として、ごくありふれたものであるにもかかわらず、どうして、この和歌の場合、これほどまでにそれが見わけにくいのであろうか。

世の中にいづら我が身のありてなし あはれとや言はむ

あなうとや言はむ [雑下・943]

和歌の中に使われていても、これなら同定に迷うことはない。そこで、この「うめ」の和歌の全体の意味が確定されたところで、あらためて読み返してみると、この和歌は、第1句の「目に」がなくても十分に通じるし、むしろ、それを欠いている方が、はるかに自然な言いかたになることが分かる。「目に」を入れるという条件であれば、「目には」とでもありたいところである。「あなうめに」というのは、やはり、「うめ」を詠みこむために無理をした言いかたであって、その無理が理解の妨げになっていることは否定しがたい。

「うめ」という厄介な仮名連鎖を詠みこんで、ともかくも、ウメを題材とする1首をまとめあげたのであるから、この和歌は、それだけで十分にその技巧が評価されたであろう。「目に」が余分であるために意味がとりにくくなっているというような言いかたは、みずから手をくだすことのない立場からの批評にすぎない。換言するなら、この作者の技倆をほんとうに appreciate できたのは、かつて同じ試みに挑みながら成功しなかった人たちや、最初からその試みを断念していた人たちだけ——といっても、それは、ことばをことばとしていとおしむ『古今和歌集』的 disposition を共有していたすべてのうたびと



たちということになるであろうが——であったというべきである。かれらは、「目に」を余分な語句の無理な挿入としてでなく、創意工夫の一つとしてすなおに受け入れたはずである。

今日のわれわれは、日常的な体験に基づいて、この和歌の到達しえた水準の高さを感じ取ることができず、語音排列則による制約という観点から検討を加えることによって、そこに、尋常な手段をもってしては突き破ることのできないことばの障壁が存在した事実を確認し、はじめて、観念的ながら、その困難さを理解するのが精いっぱいである。

「あな憂、目に」というのが、苦しまぎれのぎこちない言いまわしとしてでなしに、むしろ、積極的な工夫の成果と認めるべきことは明らかである。叙上の検討の結果は、作る立場を考慮しない一方的な評価の危険性に対する警鐘としての意味を持つが、同時にまた、手のこんだ理づめの解釈作業によって導かれる帰結が——たとえ、どれほど正鵠を射たものであったにせよ——、文学的理解として、埋めがたい欠落を持たざるをえないという現実をも、われわれに切実な形で教えるものである。言語学的方法に基づく接近をもってしては、結局、隔靴搔痒の段階にまでしか迫りえず、その文学作品としてのすばらしさやおもしろさを理屈ぬきに味わうことのできない場合がしばしばありうることをわれわれは十分に承知してかからなければならない。

言語研究の立場からするならば、いかなるすぐれた文学作品であっても、つまるところ、一個の言語資料であることに相違はない。しかし、ただそれだけの観点から、作品の中に認められる諸現象を機械的に処理することによっては窮極的な真実に迫ることが難しいと小論の筆者は考えている。文学作品から導かれる言語的真実と、訓読文献等から得られる言語的真実とは、全面的に相同ではありえない。一般に、古典文学作品の内容の理解には、言語学的接近によっても、また文学的接近によっても、それぞれに超えがたい一線があり、その一線を克服しうるものがあるとしたら、それは文献学的接近だけであろう。しかし、それですらも、近づきうる限界は厳然として存在することを認めざるをえない。その意味において、時間の隔りは絶対的な障壁である。

#### 4.

ウメに相当する語の表記は、概していえば、片仮名系の文献においては「ウメ」、そして、草仮名系の文献においては「むめ」となっている。語頭音の実際の発音は、「う」にも「む」にも近似し、かつ、そのいずれとも一致しない

ものであったと考えられる。おそらく、それは、現代語にも伝統をとどめる独立音節の [m] であったとみるのが妥当であろう。

『古今和歌集』の和歌は、その原初的な段階において、事実上、すべてが草仮名をもって表記されていたはずであり、現存する古写本においても、この語は「むめ」と表記されている。隠題を詠みこむ場合には、その語句の発音ではなく、それを表記した仮名連鎖の形だけが問題であるから、もし、「うめ」でなしに「むめ」の方が隠題として選択されていたとしたら、事態はまったく違った様相を呈していたであろう。すなわち、「むめ」であれば、「む」の仮名をいくつかの助動詞の語尾に結び付けることが可能であるから、ほとんど工夫らしい工夫を要せずに——具体的にいうなら、「さくら」の場合よりもいっそう容易に——、それを詠みこむことができたはずである。ということは、とりもなおさず、「むめ」という仮名連鎖では、隠題として詠みこむだけのおもしろみがなかったということにほかならない。したがって、ここでは、同一の語形を表わす二つの異なる表記のうちから、詠みこみにくい方の「うめ」が隠題とされているところにみそがあり、それが作者の創作意欲をそそったものと考えべきであろう。

隠題として選ばれている語句の大部分が、それ自体としては和歌の題材にされることのない語句によって占められているという事実を第1節において指摘したが、そういう全体的な傾向にてらして考えるなら、片仮名文献の方に用いられる「ウメ」——、ここではそのまま草仮名に置き換えられて「うめ」——という表記が採られているのも、これら二つの仮名連鎖を等価とみなしたうえで、の恣意的な選択の結果であるとは認めがたい。

## 5.

和歌の洗練された用語から音便形は排除されるのが原則であった旨を第2節において指摘したが、この歌集の中でただ1例だけ、つぎのように、物名歌にそれを使用したものがある。

きちかうのはな

友則

あきちかう のはなりにけり 白露の置ける草葉も色変はりゆく

[物名, 440]

初めの2句は、「秋近う野はなりにけり」という意で、その中に隠題の「桔梗の花」が実に巧みに詠みこまれている。「桔梗」は漢語なので、「梗」の字音の韻尾 [ŋ] は「う」の仮名によって転写されたが、この時期には、まだ十分に鼻

音性を保存していた。しかし、この仮名連鎖を隠題として詠みこむ場合、それは単純に「う」の仮名であり、したがって、母音音節の [u] に当てなければならないために、「うめ」の場合と同じく、語音排列則による制約が加わることになる。この場合には、「う」の仮名の前後に3字ずつの仮名があるので、「うめ」よりも格段と難しい隠題であったといってよい。こういう仮名連鎖をあえて隠題とする以上、諸制約のうち、すくなくとも一つは解除しなければならない。漢語を導入すれば、処理がずっと楽になるが、「桔梗」そのものが漢語であるから、安易な切り抜けになるだけでなく、よほど日本語に馴化した語でないと生硬な感じになってしまう。そこで、多少とも俗な語感を伴うことに目をつぶって、音便形を当てることにしたのであろう。いわば、最初から反則を前提にした隠題であるが、同時にまた、その反則を埋め合わせるに十分なだけの、和歌としての出来ばえが要求されていたと考えるべきであろう。この和歌の場合、その条件は十分に満たされていると認めてよさそうである。

『拾遺和歌集』巻第7も物名歌であり、その中に、これと同工異曲というべき和歌が収められている。

きちかう

(詠人知らず)

あだびとのまがきちかうな花植ゑそ 匂ひもあへず折りつくしけり

【物名・363】

第2句は、「籬近うな」で、ここにも、同じく「近う」が用いられている。歌集の成立順序からすると二番煎じのようにみえるが、「詠人知らず」でもあり、ほんとうは、こちらの方が先行する作品であって、紀友則による「きちかうのはな」の和歌は、これを下敷にしている可能性も否定しにくい。『古今和歌集』に洩れたこの和歌を、『拾遺和歌集』が採録したということなのかもしれない。

詩歌の用語の洗練は、日本文学に特有の現象ではなく、また、『古今和歌集』に始まるわけでもない。『万葉集』の用語も、すでに日常語と明確に一線を画していたとみなすべき徴証があるが、巻第16の後半部には、かみしもを脱ぎ捨てて、漢語を自由に交えた作品が収められている。内容もそれに応じて卑俗であり卑猥にまで及んでいる。一種の息ぬきということであろう。平安時代の物名歌も、やはり息ぬきとして位置づけられていたために、音便形の使用にも寛大でありえたと理解すべきであろうか。

ちなみに、『拾遺和歌集』巻第7の最初に置かれているのは、つぎの和歌である。

## 紅梅

詠人しらず

うぐひすの巢つくる枝を折りつれば こうはいかてか産まむとすらむ

【物名、354】

撰者の脳裡には、当然、『古今和歌集』の「うめ」があり、そして「うぐひす」があって、目先を変えたのが「紅梅」ということなのであろう。下の句が、「卵をば如何でか産まむとすらむ」という意味であることは明白であるが、格助詞「を」の期待される箇所が「う」になっている。隠題が「こうはい」に相当する語であるから、「う」を「を」にすり替えることは許されないので、この形をとるのが、その意味において、当然であるが、ごまかしには相違ない。ただし、そのごまかしは、かなり念が入っている。

藤原定家自筆本によれば、隠題は漢字で「紅梅」と記されている。物名歌は、本来、仮名連鎖を詠みこむものであるにもかかわらず、その仮名連鎖が特定されていないのは不自然といわざるをえない。この場合、それを仮名で「こうはい」と表記すれば、「う」の仮名が絶対的になってしまうが、「紅梅」であれば、それを読んだ形は [koubai] である。一方、和歌の方は、それを忠実に読めば [kowoba(i)] であって、[kou] と [kowo] とは聴覚的にかかなり近似しており、文脈がそのずれを埋め合わせるから、意味の理解に支障をきたすことはない。そこが、いわば付け目である。この隠題は、原撰本ですでに漢字がきになっていた蓋然性が高い。なお、この点に関しては「はせをは(芭蕉葉)」【物名・454】とも関連して論じる必要があり、また、諸本の異同をも問題にすべきであるが、多岐にわたるので省略する。

仮名連鎖が、発音に——というよりも、実際には、その一致でなしに類似に——すり替えられている事実を、苦肉の策とみなすか。はたまた、斬新な工夫とみなすかは、評価の分かれるところであろうが、いずれにせよ、それが語音排列則による厳しい制約をかわすために考え出されたものであることに変わりはない。やはり、これも、息ぬきであったからこそその目こぼしとみなすべきであろう。ただし、『拾遺和歌集』においてこの手法が許容されていることをもって、『古今和歌集』でもそれと同じ扱いを受けたはずであると、ただちに考えてよいかどうかは疑問である。すくなくとも、後者の中に、これに類する事例は一つも含まれていない。

## 6.

この小論における主要な解析の対象は、巻第10の冒頭に置かれているつぎの

和歌であって、前節までの検討は、実のところ、そのための予備的な手続として行なったものである。

うくひす

藤原敏行朝臣

ころから はなのしづくに そほちつつ うくひすとのみ

とりのなくらむ [422]

上の句は、「心から花の雫に濡ちつつ」、すなわち、〈自分から好きこのんで、花から花へと飛びわたり、春雨のしづくにぐっしょりとなった状態で〉といった意味あいである。「はな」は、もとより、ウメの花を指している。

この和歌における解釈上の問題点は、もっぱら下の句の方にある。「うくひすとのみ」という第4句は、ここに「うくひす」を隠題とする物名歌であるむねの断りが付されていないければ、「鶯とのみ」と、ほとんど疑いを抱くことなしに読んでしまいそうなどころであるが、いまの場合、それでは問題にならないし、また、結局、文脈も通じないから、作者の意図が別のところにあることは明白である。第5句の「とり」はウグイスに相違ないが、いったい、ここで、ウグイスはなんといつて鳴いているのであろうか？

なんといつて、という問いに対する答えは、ここに「うくひす」と明記されている。したがって、われわれにとっての課題は、この仮名連鎖にどういふ語句を引き当てて、ウグイスの言いたいことの内容を理解すべきかというところにある。

ここにおいても、われわれは、「うめ」の和歌の場合と同様に、和語を支配するところの語音排列則による制約の存在を認めなければならない。すなわち、この「うくひす」もまた、母音を表わす仮名「う」から始まっているという事実である。しかも、その下には、「うめ」の場合と違って3字あるから、作者にとって、いっそう高度の技倆が要求されたはずである。

ここでは、「むめ」と「うめ」とのような関係で、片仮名系の文献にみえる方の形が選ばれているといったわけではない。この「うくひす」こそ、まさに和歌に一般に用いられている字面そのものである。したがって、これが隠題として選ばれているのは、上記のような手ごわい条件があったからにほかならないであろう。

「うくひす」というこの仮名連鎖を和歌に詠みこむためには、つぎに示す4類8種の切りかたの中から、その一つを選ばなければならない。

(a) う・くひす    う・く・ひす    う・くひ・す    う・く・ひ・す

(b) うく・ひす    うく・ひ・す

(c) うくひ・す

(d) うくひす (ウグイスとは別語)

これらは、いずれも、清濁や語調を捨象した仮名連鎖であり、いわば archi-phoneme のレベルにおける把握であるから、具体的な語形が引き当てられた場合には、それぞれが、さらにいくつかに分化する計算になるが、これだけの広がりをもその可能性として機械的に想定してみたところで、現実には当てはめうる語句としては、消去法によって、結局、「うく・ひす」、すなわち、「憂く干ず」がただ一つ残されるだけである。したがって、ウグイスは、〈(羽が) 乾かないのでうっとりしい〉と聞いて鳴いている——あるいは、泣いている——ことになる。

鳥名のウグイスを隠題とし、それを「憂く干ず」という別の意味の語句として詠みこんでいるわけであるから、その限りにおいて、物名歌としての形式上の条件は十分に充足されている。しかし、春の季節の到来を待ち焦がれていた人たちが、新鮮な喜びをもって耳にしたであろうはずのあのウグイスの鳴き声が、どうして、「憂く干ず」などと、不平がましく陰気なことばとして聞こえたのであろうか？「うくひす」という仮名連鎖を詠みこむことがこの場合の至上命令であったために、どうしてもそのようにしか鳴かせざるをえなかったのだとしたら、ウグイスにとって、これはたいへん迷惑な話である。ことばの遊びとしての物名歌においては、意外性という要因も、確かに、おもしろさの重要な引き立て役の一つであったが、それにはそれなりの筋道とか裏づけとかいうべきものがなければ、ひとびとを納得させるのが難しかったであろう。

「憂く干ず」という言いかたが、当時の語法として破格であるというわけではない。しかし、「あな憂、目に」ほどではないにせよ、この和歌のこの文脈においては、やはり、どこかに不自然さを感じさせる表現になっていて、隠題の「うくひす」が、まさにこの部分に詠みこまれていることを教えているに等しい。しかも、それが、下の句の最初という、もっとも目立ちやすい位置であるうえに、「うくひす」という所与の仮名連鎖を「うく・ひす」と単純に二分しただけにすぎない。これでは、結果的にみると隠されているはずの仮名連鎖がそのままの形で露出してしまっており、そのうえ、引き当てられた「憂く干ず」という語句が、和歌におけることばの流れに融和していないので、いかにも芸がないといった感じを免れがたい。つぎの和歌などは、どこに隠題が詠みこまれているのかと探さなければならぬほどに自然な言いまわしになっている。

竜胆りゅうたんじのはな

友則

我が宿の花踏みしだく鳥打たむ 野はなければやここにしも来る

【物名、442】

第2節の末尾に引用した和歌においては、「さくら」が、「いざ暗闇に」の中に隠されていたが、ここでもまた、それと同じずらしの手法が用いられている。ただし、「うぐひす」の和歌について、そういうずらしの手法がとられていないことは、作者の工夫の足りなかったことを意味するものではない。第2節において述べたとおり、詠みこむべき仮名連鎖が母音を表わす仮名で始まっている場合、和歌の語音排列則は、右と同じような形によるずらしの可能性を完全に封じていたからである。「うぐひす」を隠題とする以上、作者としては、いわば、ひらきなおって、「うぐひす」という仮名連鎖にそのまま相当する語句を当てざるをえなかったのは当然というべきである。

文学史的な、あるいは文学作品としての、この歌集に対する評価のしかたは、さまざまかもしれないが、ことばの操作の巧みさを否定する人は、おそらく、いないであろう。《『古今和歌集』に凡作なし》という作業仮説を第1節において設定し、その立場から「うめ」の和歌の表現技巧を解析してみたが、それによって得られた結果は、その作業仮説に矛盾しないものであった。この「うぐひす」の和歌についても、われわれは、やはり同じ姿勢で対する必要がある。すなわち、語音排列則による制約のためにこういう形にしか作りえなかったという事実をもって、この和歌の出来ばえの悪さを正当化してしまうのは誤りであって、そういう厳しい枠づけを克服して、どのような表現上の工夫が積極的に試みられているかを見いだすのが、われわれの課題だと考えるべきである。まして、この歌集、全20巻の、それぞれの冒頭に据えられた和歌は、いずれも、その巻を代表し、あるいは象徴するような名作が選ばれているという事実から考えても、この第10巻だけがその例外であるとなすべき理由はない。ここでも、われわれは、表現の解きほぐしが要求されているようにみえる。

その解きほぐしの端緒は、どうやら、「うぐひす」という語の、その語形にあるのではないかと推察されるので、たかだか1首の和歌を解釈するためにはあまりに迂遠にすぎるようでもあるが、まず、その点から解明を始めることにしたい。

## 7.

「うぐひす」がその一例であるように、鳥の名の中には、その語形の末尾に

「す」を持つものがいくつか指摘できる。「からす」「きぎす(きぎし・きじ)」「ほととぎす」などは、源順撰の『和名類聚抄』、ないし、それ以前の文献資料にそれぞれ証跡をとどめているし、文献資料のうえに姿を現わすのは遅いが、「かけす」もまたこの一類に属している。また、一方には、「かもめ(かまめ)」「しめ」「すずめ」「つばくらめ」「ひめ」「やまがらめ」など、末尾に「め」を持つ一群もある。

方言調査の結果をこれに加えれば、さらに例を増やすことが可能かもしれないが、どちらの群も、それほど数のにはなりそうにない。しかし、このぐらいそろえば、偶然の集合ではないと考えるべきであろう。ただし、ここには、それらについて総合的な考察を行なうだけの余裕も用意もないので、以下、当面の課題である「うぐひす」と直接に関連するところの、「す」に終わる鳥名だけに限って個別に検討を加えてみることにする。

## 8.

ホトトギスについては、それが鳴くことをさして、「名告り鳴く」と表現した例が、大伴家持作の2首の短歌の中に見えている。

曉あけに名能里奈久奈流 保登等芸須 いやめづらしく思ほゆるかも  
 【万葉・巻18・4108】

卯、の花の咲くにし鳴けば 保等登芸須 いやめづらしも  
 名能里奈久奈倍 【同・巻18・4115】

「名告る」とは、相手の存在を意識し、その相手に、自分がなにものであるかを知ってもらう目的で、正式の名を明瞭に告げる行為をさして使われる動詞である。したがって、上記の2首の和歌では、ホトトギスがかかってに鳴いていて、その声が聞こえてくるということではない。ウメが咲くとウグイスがやってくるのとちょうど同じように、卯の花が咲くと山からホトトギスが里に下りてきて鳴き声を聞かせてくれるようになる。快い五月の到来は、ホトトギスの初声によって確認される。ひとびとは、そのころになると、「山ほととぎす、いつか来鳴かむ」という気持で、曉に鳴くその声を聞き洩らすまいと聞き耳を立てて待っている。ホトトギスもそのことをよく心えているので、里におりてくると、早速、自分がちゃんと来ていることを知らせるために、はっきりと自分の名を言う、ということである。聞かせる相手は、おちおち寝もしないで、その声を聞こうと待っている人びとである。ひと声しか鳴かないのも、「名告る」という行為にふさわしい。生態学的にいうと、ホトトギスが鳴くのは、領



地 (territory) の宣言であろうが、これら両者の場合、他のホトトギスを寄せ付けないために自分の名を明らかにするという意味として読んだのでは、もはや文学ではないであろうし、その鳴き声が「いやめづらし」ととらえられるはずもない。

平安時代以降の和歌では、「名告り鳴く」でなしに、ただ「名告る」だけでそれをさすようになるが、ホトトギスが好んで題材とされているに於ては用例がさほど多くない。たとえば、『古今和歌集』夏歌、34首のうち、29首までが、ホトトギスを詠んだ和歌によって占められているにもかかわらず、鳴き声を立てることをさす動詞としては、「鳴く」ひとつだけしか用いられていない。端的にいえば、「山ほととぎす、いつか名告らむ」というような言いかたはしていないということである。クイナの鳴き声を「たたく」と表現するのと同じように、ホトトギスについて、普通に「名告る」といっていたわけではないことに注意したい。

和歌でさえそういう状態であるから、散文となればなおさらであるが、そのような中であって、『枕草子』にみえるつぎの例は注目に値する。

夕暮のほどに、ほととぎすのなのりて渡るも、すべていみじき

【節は五月の】

「名告る」という行為は、本来、人間どうしの関係づけのためであって、『万葉集』の場合も、ホトトギスは擬人的にとらえられているとみなすべきであろう。そのとらえかたは、やはりここでも同じである。擬人的とか比喩的とかいっても、根幹的な意味はそのまま生きているはずであるから——また、そうでなければ読者にその表現意図が通じるはずもないので——、枕草子のこの用例も、ホトトギスが鳴いたことを、いわば、気のきいた言いかたとして「名告る」と表現しているわけではない。この文脈からするならば、夕暮にたたずむ清少納言の姿を認め、そのまま素どおりせず、はっきりと自分の名を告げて飛び去っていったということである。ここでは、挨拶という意味あいとして考えておいてよいであろう。ただし、散文の例ではあるが、清少納言の脳裡につきのとおり和歌があり、読む側もまたその和歌を想起したということ、可能性としては考慮に入れるべきかもしれない。すくなくとも、発想も場面的条件も一致している。

題しらず

大中臣輔親

あしひきの山ほととぎす里なれて たそかれ時に名告りすらしも

【拾遺・雑春・1076】

## 9.

ここにおけるわれわれの関心事は、ホトトギスが、はたして、自分の名をなんと名告ったのかということである。ホトトギスの正式の名は「ほととぎす」であるから、すなわち考えれば、その形でよいということになりそうである。上代から——あるいは、さらにそれ以前から——、この鳥の鳴き声は「ほととぎす」と聞きならわされていたために、こういう表現が可能であり、また、その表現が、意図されたとおりに理解されたのであろう、という考えかたである。そういう聞きならわしの習慣が一般的でなかったとしても、「名告る」と表現すれば、だれにでもすぐにそれが通じた——すなわち、そういうように表現されれば、なるほど、そのとおりに鳴いていると感じられた——ということでもよい。

狩谷掖斎の『箋注和名類聚抄』(以下、『箋注』と略称する)、巻7、「羽族部」  
「鳥名」の当該項目についてみると、「按ずるに、保度度岐須は、鳴声を以て名と為す」と注記されている。鳴き声を「ほととぎす」と聞きなして、それをそのまま鳥の名としたということであるから、『万葉集』の「名告りて渡る」も、その語源解釈と符節を合わせているといってよさそうである。しかし、これは、大伴家持も清少納言も、そして狩谷掖斎も、時を隔てながら、まったく同じ感じ取りかたをしていたという以上のことを証明するものではない。理屈を通すなら、「ほととぎす」という名称の起源は不明とせざるをえないであろう。

上には、ホトトギスが自分の名を「ほととぎす」と名告ったというすなおな線<sup>1</sup>で考えてみた。実際の発音は、pototogitsu といったところであろうか。しかし、可能性としては、そのほかの名もありえないわけではない。卑近な例をとるなら、現今、イヌは、「わんわん」とか「わんこ」とかいう擬声的な別名をいくつか持っている。それらは、いずれも幼児語であるが、幼児の立場からとらえるなら、イヌが尾を振りながら自分に向かって「わん」と吠えれば、それはイヌが名告ったことになるであろう。すくなくとも、おとながその情景を「名告る」という動詞を用いて巧みに描写することは可能である。「吠えた」というよりも「名告った」という方が、はるかにその親近感を表現することができる。ニワトリに、「こっこ」とか「こけっこ」とか名告らせても効果は同じである。そういう擬声的な別名は幼児語に高い分布を示すが、さりとて、幼児語だけに限定されているわけではない。

この当時、ホトトギスが、「ほととぎす」のほかに、その鳴き声を彷彿させる

ような——たとえば、kyokyo といったような——なんらかの別名によっても呼ばれていたとしたら、『万葉集』の「名告り鳴く」や『枕草子』の「名告りて渡る」という表現から、それぞれの時期の人たちが、具体的になんという名を喚起されたのかは、もはや知るすべが残されていない。文献資料は、そのたぐいの語彙に対して極端に冷淡だからである。

つぎの和歌は、やはり藤原敏行の作で、誹諧歌の中に入れられているが、そのおもしろさとか、あるいは、おかしさとかいふべきものが、どこにあるのか分からず、われわれは、ほほえみも笑いも誘われることがない。

いくばくの田を作ればか ほととぎす してのたをさを  
朝な朝な呼ぶ [雑体・1013]

「してのたをさ」の意味については、古来、さまざまに言われてきているが、上のような根本的な問題点を明確に指摘し、それを積極的に解明しようと試みた注釈は、管見の限りにおいて、見だしがたいようである。たとえば、本居宣長の『古今集遠鏡』には、つぎのように訳されているが、これでは、誹諧歌としての解釈にまったくつながらない。

○ドレホドノ田ヲ作ルトテ 時鳥ハ アノヤウニ シデノタヲサヲ  
毎朝々々 呼ブ事ゾ

この和歌の持つ表現のおもしろさを解く鍵は、おそらく、ホトトギスが口にしてその具体的なことばの意味にあると推察される。その鳴き声が「してのたをさ」と聞きならわされていたということであれば、それで、いちおう、つじつまが合わないこともないが、それだけのことであれば、依然として、誹諧歌にはならない。「ほととぎす」という仮名連鎖に、この文脈に適合する意味を持ったことばを引き当てようと試みても、成功はおぼつかない。

英語で、ホトトギスは little cuckoo と呼ばれているようである。カッコウ (Japanese cuckoo) は、同じくホトトギス (杜鵑) 科に属し、ひとまわり大きいだけで、外見も特徴的な習性もホトトギスによく似ている。しかも、中国ではカッコウを指す「郭公」という表記が、日本で古くからホトトギスに当てて用いられているという事実がある。『古今和歌集』のこの和歌も、たとえば伊達本では第3句が「郭公」と記されている。もし、この「郭公」がカッコウをさし、それが人間としての「郭公」(「公」は高位の人物をさす)を自称しているものととらえられているとしたら、舞台を中国に移して、「田長」に結び付く故事が求められるのではないかと考えてみたが、いまのところ、いとぐちが見あたらない。なお、「あさなあさな鳴く」は、ホトトギスでもよいが、カッコ

ウの習性にも矛盾しない。

ちなみに、石山寺蔵の、いわゆる「時鳥願文」は、つぎのことばで書き始められている。

御前の令聞時鳥之声給也、能々可祈念之由、只今遣仰給也

いまわしいホトトギスの声をお耳にしておされたので、凶事の出来しないよう、よくよく祈念してほしいというのが、この願文の趣旨であると解されている。ホトトギスが冥府と往来するという俗信と結び付ければ、ひとまず説明が可能であろうが、これもまた、ホトトギスの口にする不吉なことばに、ほんとうの理由があるのかもしれない。ただし、一般に、鳥の鳴き声などというのは、たがいにまったくかけ離れた意味の、さまざまのことばとして聞きなされるものであるから、かりに、一方で不吉なことばを口にしていたとしても、それをみずからの名として名告っていたとは限らない。要するに、決定的な証拠が欠如しているために、確実なことがなにも言えないということである。

さきに触れたとおり、『箋注』には、「ほととぎす」という語形が擬声語起源であると説明されている。そのように認めるべき根拠は示されていないが、あとで述べるところからも推察されるように、あるいは、「す」を語末に持つ鳥名を一括してそのようにみなす立場をとろうとしたものかもしれない。かりにそうだとしたら、かれをその考えに導いたのは、そして、その考えの支えになったのは、勸以上のものではありえない。したがって、その語源解釈は、質のうえからいって、俗解と一線を画しがたいものである。しかし、われわれの勸もまた——いくらかもっともらしい表現のしかたをすれば、日本語研究にたずさわる立場から、その蓋然性を直覚的に査定しても、やはり——、擬声語起源について肯定的である。それは、「ほととぎす」という語形が、その鳴き声を写したものとみてもおかしくないからであって、日本語としてのそういう感覚が生きつづけていた限り、この鳥は、『万葉集』以来、——あるいは、それ以前から——、「ほととぎす」と名告っていたとみなすのが穏当であろう、名告るのはその正式の呼称であるということも、この推定を支持している。ただし、次節に述べるような事実もあるので、あまり断定的にいうのは控えておいた方がよい。

## 10.

『枕草子』の中で「名告り」をしているのは、人間はもちろんのこととして、ホトトギスばかりではない。「うぐひす」について考えるために「ほととぎす」

を検討し、その延長として「蚊」にまで及んだのでは逸脱も度を超えてしまいそうであるが、小論の主題と無関係ではないので、ここで考えてみることにする。

ねぶたしと思ひて臥したるに、蚊の細声にわびしげに名告りて顔のほどに飛びありく。羽風はかぜさへ身のほどにあるこそにくけれ

[にくきもの]

眠りにつきたいのに、どこからか蚊が舞いこんできて、〈「か」と申します(どうぞよろしく)〉と、小さい不景気な感じの声で自己紹介をしながら、こちらの迷惑などお構いなしに、顔のあたりをねらって飛びまわるのは、なんともにくにくい、といったところであろうか。

ホトトギスは、人びとが今か今かと待ちわびていた遠来の客であるから、その「名告り」は、すなおに歓迎される。しかし、蚊の分際でありながら人間と近づきになろうとして自分の名を名告るなどとは、許しがたい横柄さである。しかも、「か」などというたった1音節のけちな名前しか持たないくせに、小さな体に相応の、いかにもよわわしい声でそれを名告り、そのうえに、〈これでも一人前ですよ〉と言いたげに、かすかな羽風まで感じさせるとは不屈き千万だ、という気持である。「細声にわびしげに」という表現は、一見したところ、〈遠慮ぶかく小さな声で〉という意味のようにみえるが、作者がここで言いたいのは、〈せいぜいがんばってもその程度の声しか出せないくせに〉ということであろう。名告りは、本来、元気よく大声にするべきものなのに、という含みを持っている。追っても追っても付きまとって離れない蚊の、執拗で小さな羽音は、その小ささのゆえにかえって神経をいらだたせる。

草仮名文献では、仮名1字で「か」としか書かれていないが、承暦3年(1979)抄本『金光明最勝王経音義』の「蚊」の項(第1巻)には、右に示すような形で注記が加えられている。この虫の名は「加阿」という二つの真仮名によって表記され、それぞれに上声の声点がさされてあるから、高く平らな調子で、しかも、長く引いて発音されていたことが知られる。念のために言い添えれば、これが口頭語の形である。したがって、「か」というより、実質的には「かぁ」であったと考えてよい。これなら、いかにも擬声的な感じであって、「名告る」と表現されてもおかしくない。なお、『枕草子』のつぎの一節に、カラスの鳴き声が「かか」と写されている事実も参考になる。これも、「かぁかぁ」ないし「がぁがぁ」を写した形であろう。

蚊  
・加音  
・阿文

必ず来なむと思ふ人を、夜一夜、起き明かし待ちて、暁がたにうち忘れて寝入りにけるに、鳥の、いと近く、かかと鳴くに、うち見あげたれば昼になりける、いみじうあさまし【あさましきもの】

「か」という語形が擬声語起源であるかどうかについての証拠など求めようがないし、また、起源のいかんを問わず、この作品の成立した時期に、それが羽音と結び付くものとして一般に意識されていたかどうかも分からない。まともな文学作品で蚊が話題にのぼるようなことは稀であるし、その羽音などが辞書や音義のたぐいに和訓として掲載されることもない。それに対応する漢字がないからである。したがって、蚊の羽音が——というよりも、この文脈に合わせていうなら、その声が——、ことばとしてどういう語形を持っていたのかを確定しうる手がかりは得られないが、清少納言の個性的なとらえかたからするならば、蚊に、ずうずうしくここで「名告り」をさせたのは、彼女の独自のひらめきであり、同時にまた、その表現は、読者にそのままに通じ、なるほどと膝をたたかせるおもしろさを持っていたとみるべきであろう。

議論をこのあたりにとどめておけば、いちおう、おとなしい解釈といえるかもしれない。また、〈虫、鳥などが存在を知らせて鳴く〉、〈虫・鳥などが鳴声を立てる〉、あるいは、〈鳥や虫類が自分であることを知らせるように声や音を出す〉、といったたぐいの、普通の辞書類にみえる「なるの」についての説明に比較すれば、ひとつの進歩だといってもよさそうである。しかし、すくなくとも、もう一つの可能性として、つぎの解釈がありうることを、ここに指摘しておくなければならないであろう。

## 11.

蚊の名は「かゝ」であるから、みずから「かゝ」と名告ったとみて不都合ではないが、この虫が、そのほかに、名告りうる——あるいは名告るべき——正式の名称を持っていたとは考えられないであろうか。これが、さしあたりの問題である。

蚊よりもその体がずっと大きく、しかも、人間に恐怖感さえ与えるハチの羽音は、『万葉集』の中に、つぎの形で記しとどめられている。第4句は、「いぶせくもあるか」と訓じられており、したがって、「蜂音」は「ぶ」を表わしていることになる。

たらちねの母が養ふふ蚕ののまよごもり 馬声蜂音石花蜘蛛の鹿鹿  
妹いにあはずて【巻 12・2991】

「いぶせくもあるか」というひとつづきの中では、バ行子音が母音間に位置しているために、「ぶ」が破裂音ではなく、摩擦音の [β] を頭子音として実現されたであろうが、その「ぶ」の音節を単独に発音した場合の音価は [bu] であったと考えてよい。しかし、その推定は、当時、ハチの羽音が、まさに [bu] という語形として一般にとらえられていたことを——というよりも、それ以外のいかなる形でもとらえられていなかったことを——、ただちに意味するものではない。擬声語であるから、その擬声度、ないし迫真性の差に応じて母音の長さは可變的であったとみるべきであろうし、鼻音の添加もありえたはずであるから、ことばのレベルにおいても、ある程度の幅が、当然、あったものと考えられる。

膜翅目の昆虫で、ハチと蚊との中間に位置づけられるのがアブである。前節において言及したところの『金光明最勝王経音義』には、「蚊」の項につづいて「蝸」の項があり、右に示すような注記が施されている。和訓

「安父」の「父」は濁音仮名であるから、仮名がきにすれば「あぶ」	・蝸
に相当し、また、それら二つの真仮名に加えられている声点は、	・安音
	・父亡

《平東》、すなわち [O●] 型を表わしている。したがって、その第2音節は、下降調で長めに発音されていたわけであるから、アブの羽音を連想させるに十分である。ハチは「ぶう」ないし「ぶん」と飛んでおり、アブもまた、それに近い羽音を立てていたものとみなしてよさそうである。いまの場合、8世紀と11世紀との時間的な隔りは、文献資料の偏りにすぎないから、事実上、無視してよいはずである。

さらに、それより約700年後の、宿屋飯盛編『画本虫撰』（1787年刊）には、「虻」という題を付して、紀定丸作のつぎの狂歌があげられている。

耳のきはの虻とや人のいとふらん さしてうらみん はりももたねは

具体的に羽音が描写されているわけではないが、耳もとにアブの「ぶう」が付きまとう感じである。ただし、そのようにこの語形をとらえることが、記号の恣意性に対する反逆を意味するわけではない。「あぶ」という語形が擬声語起源であろうとなかろうと——もとより、そうであった方が説明にいつそう有利であることまでは否定しないにしても——、結果として羽音に結び付いてさえいれば、それだけでいまは十分である。

## 12.

蚊の立てる羽音は——というよりも、この小論の立場からすると、それが立

てうる羽音は、と表現した方が、さらに適切であるが——、ハチはもちろん、アブに比しても、はるかによわよわしい。今日、それは、一般に、「ぶん」ないし「ぶん」という形でとらえられている。この場合における母音の長さの違いは、音韻論的な対立ではなく、その場その場のゆれにすぎないから、安定した語形、ないし基底的な語形を設定するとしたら、それは「ぶん」ということになるであろう。この「ぶん」という擬声語が昨今になって新たに形成されたものでないことは十分に推測できるが、その淵源がどこまで溯りうるかを文献資料に基づいて明らかにしようとするのは、方法として誤りである。『万葉集』にみえる「馬声」「蜂音」などの証憑は偶然の幸運というべきである。ただし、この「ぶん」についても、だいぶあとの時期のものではあるが、そういう偶然の幸運がないわけではない。

世の中にか程うるさきものはなし ぶんぶと云て身を責るなり

これは、太田南畝の随筆『一話一言』巻 45、「流行落書之事」の条の末尾にあげられた3首の中の最初に置かれているものであって、文武両道を奨励した寛政の改革が揶揄されている。太田南畝は自作であることを強く否定しているが、そのことばを信じてよいかどうかについては議論の余地がある。しかし、われわれの当面の関心にとって、その帰趨はどうでもよい。このように貴重な言語資料をその副産物として残してくれた松平定信に感謝するだけである。

この狂歌は巷間に広く流布したらしく——また、その流布の事実が「流行落首之事」の条に採録されたことの一次的な理由として説明されてもいるが——、ほかに、同時代のいくつかの文献に記録されており、それらを相互に比較してみると、下の句に異同が認められる。第4句が「ぶんぶぶんぶと」となっているものがあり、また、結びの句は、「夜も寝られず」という形の方がよく知られている。いずれにせよ、「文武」との重ね合わせであるから、今を溯ること200年以上の昔、蚊が「ぶんぶ」と人を責め立てていた事実が、これによって証明される。「ぶんぶ」は「ぶんぶん」と実質的に等価であり、したがって、蚊の羽音は、この場合、「ぶん」という形でとらえられていることになる。ちなみに、太平洋戦争終了後、評論家の大宅壮一が「文化国家」を「ブン蚊国家」ともじって、当時の政策を批判している事実があるので、現代でも、蚊の羽音が「ぶん」だけに固定しているわけではない。

擬声語の場合、p- と b- とのようになしと有声音とが対をなして程度の差を表わすのは、日本語にみられる伝統的な類型である。それによって、単純に、



音響の物理的な大きさの違いが表わされることもなくはないが、音の大きさそのものは全く同じであっても——あるいは、実際には逆であってさえも——、それをとらえる側の心理的な受け止めかたの差が——すなわち、快・不快の感覚などが——、象徴的に反映される場合も少なくない。上にあげた「ぶんぶ」とか「ブン蚊」とかいう形は、飛びまわる蚊の数の多さを表わすと同時に、執拗にまつわりつくそのわずらわしさをも表わしたものとみなしてよい。いかなる場合にも、蚊の羽音が快い音ではありえないが、そのような意味あいを含めて「ぶん」と強調的に表現されていることは、とりもなおさず、その羽音が普通にとらえられれば、無声音の方の「ぶん」であったことを十分に示唆している。上に述べたとおり、こういう対比のしかたは極めて古くから存在したと推定できるので、『枕草子』の成立した時期において、蚊の羽音は、通常、「ぶん」であり、それがやかましく耳につけば「ぶん」としてとらえられていたであろうことは想像にかたくない。なお、そのつもりで読めば、前節に引用したカラスの鳴き声なども、「かぁかぁ」より「がぁがぁ」の方が、眠りの妨げとしては適切のようであるが、仮名に清濁の書き分けがないために、いづれとも決しがたい。

ハチは普通に飛んでも、それが与える強さや恐ろしさの印象まで加わるために、つねに「ぶん」でしかありえなかったが、蚊の方は、うるさく付きまとう場合に、「ぶん」と強調的に表現された。それらの語形を構成するそれぞれの音は、正式の音素目録に含まれているか否かを問わず、ともかく、確実に区別されて存在しており、しかも、音韻変化の影響を、事実上、こうむっていないので、端的にいうなら、今も昔も、基本的には変わりが無い。

「蚊の細声にわびしげに名告りて」という表現は、ともすると、「ぶん」よりも「ぶん」の方をわれわれに喚起させやすい。程度の差という観点からするならば、「細声に」も「わびしげに」も、ともに積極的に負の含みを帯びているからである。しかし、人間の側からでなしに名告っている蚊の立場からするならば、精いっぱい声を張り上げているのであり、そもそも、清少納言が、ここに「名告る」という動詞を使っているのは、蚊を擬人的にとらえ、その立場から表現しているわけであるから、「ぶん」のつもりとみるのが正しいであろう。安眠を妨げる「にくきもの」であれば、なおさらである。

以上の検討によって得られた帰結を踏まえて考えるなら、この場面において、蚊が「ぶん」と名告ったとみても矛盾を生じないようである。すなわち、日本名の「かぁ」でなしに、いわば、唐名の「ぶん」氏を自称したということ

である。「蚊」氏ではあまりに権威に乏しく格好のつけようもないが、彼の発音にその手がかりを求めるとしたら——そして、今の場合には、当然、発音された形がその名を同定するための直接の手がかりとなるわけであるから——、中国姓として必ずしも珍しくないところの「文」氏を名告ったとしても——というより、事実としては、作者自身がその姓を彼に名告らせたとしても、というべきであるが——、いっこうに不自然ではない。

断りもなしに忍びこんできて、いかにも陰険な態度で、まつわり付いて離れない蚊が、吹けば飛ぶような「かぁ」などという名でなしに、文字のうえからは教養のかおりさえ漂わせるような「文」などという立派な名前を名告りつづけるところに人格的な問題があり、それがいかにも小癪な感じを与えるために、「羽風さえ身のほどにあるこそにくけれ」ということになる。

『枕草子』のこの一節が、蚊の名告りを「かぁ」ではなく「ぶん」として——あるいは、「かぁ」とともに「ぶん」としても——理解されることを期待して書かれたものであるとしたら、それは、清少納言のさりげない sophistication というべきであろう。

以上の解釈は、一つの可能性として提示したものであって、このように考えなければならぬとまで主張するつもりはない。確かに、蚊に「かぁ」と名告らせるよりも「ぶん」と名告らせた方がずっとおもしろく読めそうであるが、いりほがの危険性もまた否定しがたいであろう。そのことを十分に承知したうえで、あえてこの解釈を持ち出したのは、言語史研究が、ときに文献資料の厳しい枠を超えて、ことばの一般的なありかたから現象をとらえなおしてみるのも必要であることを、具体例に即して示してみたからである。小論の筆者としては、それがいりほがでありうることを指摘したが、このような解釈にもそれなりの筋だてがある以上、いっそう合理的なもうひとつの筋だてによる解釈が提出されるまでは、その有効性を主張しうるであろう。

### 13.

ここで、ふたたび、「うぐひす」に話題をもどして考えてみることにしよう。

『箋注』では、この鳥名についての詳細な考証の中で、『新撰字鏡』に「宇久比須」という和訓を添えた漢語のみえる事実を指摘したあと、それに続けて、つぎのような語源解釈を提示している。

出雲風土記、法吉鳥、蓋是、按宇久比須・法吉、皆其鳴声

「うぐひす」も「法吉」も、ともにその鳴き声に由来するものと考えられて

いるわけであるが、沢瀉久孝他編『時代別国語大辞典』（上代編）の「うぐひす」の項では、「法吉鳥」について、「これは鳴き声からの命名か」（下線こまつ）として、「うぐひす」という語形の方をもそれと同じには考えていないことを暗に示している。

管見の限りにおいて、この語形をウグイスの鳴き声に、なんらかの形において結び付けた言語史的研究としては、亀井孝の「春鶯囀」をあげうるにとどまるようである。その論考の主要なねらいは、文献資料の確実な解釈に基づいてへ行子音の音価を再構しようとするところに置かれているが、その綿密な論証過程を追うことなしに、当面の課題に引き付け、小論の筆者のことばで要約すると、おおよそつぎのようになる。

題しらず

詠人しらず

梅の花 見にこそ来つれ うぐひすの ひとくひとくと

いとひしもをる [雑体・1011]

これは誹諧歌の冒頭に置かれた和歌であるが、第4句を「人来、人来」というだけの意味として解釈したのでは、「誹諧歌の呼びさます感覚」をうかがうことができない。古くは、ウグイスもまた、さえずる鳥の一つとされており、この「ひとく」を小鳥一般のさえずりを表わす [p, t, k]、すなわち、ピーチクに相当する形をことばに置き換えたものとみなすことによって、はじめて、その表現のおもしろみを理解することができる。そしてこの解釈を前提として考えるなら、物名歌の「うぐひす」の和歌の場合にも、「ひす」の部分は、そのさえずりをかすったものとみなすことが可能である。

以下は、小論の主題と直接に関連するので、原文のままに引用する。

こんにちのサンスセソは、摩擦音の [s-] [ʃ-] ではじまるが、古代はそこが破擦音であったと推定されるから、みぎの「うぐひす」の「ひす」に [\*pitsu] のかたちを擬することができる。「ひす」の「す」が破擦音であったとすれば、その聴覚的印象を利用して、かすりの効果をねらったといふことも十分に考へるところである。なきごゑをかすったうへで「干ず」の意味にかけたとみる方が、歌の解釈としても適切ではないかとおもはれる。

「うぐひす」というその語形の全体が鳴き声を写したものとみなすのが『箋注』の立場であるが、ここでは、和歌の技巧として、「うぐひす」の「ひす」の部分に、ピーチクというさえずりをかすったという解釈になっている。したがって、上には、「うぐひす」という語形をその鳴き声に結び付けた考えかたとし

てこの論考を紹介したが、その関連のさせかたは、いわば音的連想であって本来のものではないことになる。なお、そういう「かすりの効果」が作者のねらいであったとしたら、「ひす」の「す」は、亀井孝がまさにそのように考えているとおり、「す」という仮名でなしに、[tsu] という音そのものでなければならぬ。

結局のところ、『箋注』に示された語源解釈は、今日までのところ、だれからも支持を得られないままになっているといわざるをえない。

#### 14.

狩谷掖斎は、「からす」や「きぎす（きぎし、きじ）」などの語形もまた、それぞれの鳴き声を模したものだと考えている。

「きぎす」と「きぎし」とに関しては、前者の方がいっそう古い文献に姿を見せており、また、後世になると、もっぱら後者の方が用いられるようになっているという事実にてらして、「きぎす」を「きぎし」の転であると説明している。もし、この考えかたの筋道が正しいとしたら、「す」を語末に持つ一連の鳥名への類推が、「きぎす」への変化の直接的誘因になったとみなすべきであろう。

ただし、文献資料に出てくる順序にとらわれすぎなければ、それとちょうど逆方向の変化もまた、合理的に想定できないわけではない。すなわち、-i-i-u>-i-i-i という母音の順行同化として「きぎす」から「きぎし」が成立し、ある程度の期間、両者が共存していたが、結局、「きぎし」の方は定着することなしに消滅したのではないかということである。かりにそういう過程を経たとすれば、それなりに整った語形として導き出された「きぎし」を、ふたたび「きぎす」に引き戻したのは、「す」を語末に持つ他の鳥名の群化の力であったと考えるべきであろう。

「からす」が擬声語起源であることは、疑う余地がなさそうである。人間生活に密着し、特徴的な鳴き声を持つこの鳥の名称は、他の多くの言語においても同様の起源を持っているようである。「かけす」についても、擬声語起源とみて不自然ではない。

以上のようにみてくると、問題の「うぐひす」をひとまず保留するなら、「す」を語末に持つ鳥名は、いずれも鳴き声にその起源を持つとみなすべき蓋然性が極めて高いといってよさそうである。なお、ここまでは、対象を鳥名だけに限って考えてきたが、同じく鳴く仲間として、「きりぎりす」をもこの一群に加え

てよさそうである。ちなみに、『箋注』の「きりぎりす」の項に、その語形の起源について触れられていないのは、この造語類型が虫の名にまで及んでいると考えられていないためと思われる。

ただ、ここで問題にしておかなければならないのは、語末の「す」の性格づけである。ホトトギスが具体的になんと名告ったのかについて、いろいろと考えてきたが、もし、その形が「ほととぎす」であったとしたら、おそらく、「ほととぎ=す」という構成ではなく、末尾の「す」までを含めたこの語形の全体が鳴き声に対応していたとみなす方が妥当のようである。しかし、「からす」「かけす」「きぎす」、そして「きりぎりす」などの場合には、「す」を除いて、その上の部分がそれぞれの鳴き声に対応しているようにみえる。したがって、それらの語形に関しては、「す」の部分に接尾語とみなすべきことになる。

ホトトギスは日本語の音韻体系に基づいて鳴いているわけではない。したがって、聞きなしによっては、「ほととぎ」までが鳴き声に相当すると言い張れないわけではないし、事実、実際の鳴き声も、それほど固定ないし安定しているわけではない。しかし、「ほととぎす」という語形の全体が鳴き声を写しているとみる方がいっそう穏当だと考えるとしたら、他の鳥名との不整合について、なんらかの説明が必要になる。

「ほととぎす」という鳴き声に接尾語の「す」を付ければ、「ほととぎすす」という形になる。そういう、いわば型どおりの語形が構成されたあとで、語末における「す」の連続が嫌われた結果、それらの一方を脱落させることによって成立したのが——といっても、どちらの「す」を脱落させたのかは問題になりえないが——、「ほととぎす」という語形なのではないかと考える可能性がある。いわゆる haplology (重音脱落) の過程をそこに想定するわけであるが、いっそう簡単に言えば、二つの「す」が一つに縮約されたことになる。本来は、鳴き声をそのままに写した形であったとしても、それがことばとして完全に定着すれば、鳴き声との直接の結び付きは、いちおう——あるいは、いちおう以上に——断たれてしまうから、「からす」や「きぎす」などの「す」に併行して、「ほととぎす」の「す」もまた接尾辞として——ないし接尾辞的に——とらえられるようになったであろう。ただし、さらにあとの時期になれば、それらの諸語はまとまりを失い、他の鳥名の中に拡散してしまったものと考えられる。

蛇足を加えるなら、「め」を語末に持つ鳥名は、原則的に、擬声語起源でないといつてよさそうであるが、「すずめ」がその例外になっているようにみえる。

鈴木胤の『雅語音声考』によると、この鳥名は「すす＝め」という構成であって、「すす」の部分は鳴き声に相当すると考えられている。亀井孝は、「すすめしうしう」においてその語源解釈を紹介し、かつ強く支持しているが、それに従うとしたら、期待される「すす＝す」という語形を回避して、もう一つの接尾辞をとったのが「すすめ」であると考えざるべきかもしれない。

ここまで来れば、残されたのは「うぐひす」だけであり、しかも、その語形こそがわれわれの一次的な関心事であって、「ほととぎす」以下の検討の積み重ねは、すべて、それについて考えるための敷石にほかならない。

## 15.

前節までに見てきたとおり、「す」を語末に持つ鳥名をすべて擬声語起源とみなしうるとしたら——、「うぐひす」だけがその唯一の例外であるとは簡単に判断しない方がよい。もとより、偶合の可能性がありえないわけではないが、最終的な帰結についてはさらに慎重を期することにして、ひとまず、擬声語起源としての説明の余地があるかどうかを検討してみるのが順当な筋道であろう。

ウグイスは、「ほうほけきょ」と鳴くものだというのが——あるいは、そのようにしか鳴かないものだというのが——、現今では一般の常識になっている。亀井孝の「春鶯囀」は、その鳴き声が、過去においてさまざまな形でとらえられていたことを文献資料に基づいて証明した。しかし、その事実を踏まえて考えてみても、ウグイスが「うぐひす」と鳴いていたとは——すなわち、そのように聞きなされていたとは——、想像するのが難しい。「す」を語末に持つ鳥名についての狩谷掖斎による統一的な擬声語起源説が「うぐひす」の場合についてだけ受け入れられていないのも、日本語の話し手としての直覚がそれを拒否するからにほかならないであろう。しかし、そういう直覚にあまりに信を置きすぎるのは、しばしば誤りのもとである。

現代語でその鳴き声を「ほうほけきょ」と写すとき、その出だしの部分は [ho:] という発音である。平安時代の正式な音素目録の中に [h] は含まれていなかったであろうが、それだからといって、当時の人たちが、この音を独立に識別しえなかったはずだと考えるとしたら、それはあまりにも浅薄な音韻論の信奉者といわざるをえない。ことばの音としてのまともな位置づけがなされていなかったために、[h-] に対応すべき独自の仮名を持たず、ア行やカ行の仮名でしかそれを表記できなかったということにすぎない。たとえば、「呵々大笑」

の「呵」字が日本字音で「カ」となっている事實は、[h] が——ないし、それに近似した音が——、音素目録の中に含まれていなかったために、[xa]と[kɑ]とを聞き分けることが不可能であったとか、あるいは、[ha]という笑い声が[kɑ]と同じにしか聞こえなかったとかいうことをただちに意味するものではない。それは、あくまでも、体系的な転写 (transcription) の方式の問題である。また、平安時代に短母音と長母音との音韻論的対立がまだ成立していなかったからといって、母音を長く引いてもその長さが無視されてしまったというわけではない。これもまた、ことばの音としての位置づけのありかただけの問題である。したがって、その当時の人たちが、ウグイスの鳴き声を [ho:] という形でとらえていたはずはないということを、すくなくとも理屈のうえからは断定することが難しい。しかしまた、逆に、そのような形でとらえていたであろうと積極的にいうことは、いっそう困難である。

以上に述べた事柄は、現実でどういう音として意識されていたかを度外視して、可能性の範囲だけで考えたところの、いわば、議論のための議論にとどまるものであるが、それにもかかわらず、「うぐひす」という語形が、本来、鳴き声を写したものだっただのではないかと推定するうえで、積極的な橋頭堡たりうる考えかたであるといつてよいであろう。

ウグイスの、あの特徴ある鳴き声も、虚心に耳を傾ければ、いろいろのことばの音に引き当てることが可能である。というより、どのように引き当ててみたところで、所詮、実際の鳴き声とことばの音との間の溝を完全に埋めるのは不可能なことである。しかし、現在、われわれが、それを耳にしたとたん、最初の引きの部分を「ほう」という形として聞き取っているという事実から十分に明らかなように、それはそれとして、自然な——あるいは、すくなくとも、さほど不自然でない——引き当ての一つであることは疑いない。それを前提として考えるなら、[ho:] からその喉頭の摩擦を減じた形が——その極限は [o:] になるが——、ウグイスの鳴き声の、その出だしの部分に引き当てられたとしても、それが成立した時期におけることばの音の体系のうえからは、ことさら異とするに当たらないであろう。円唇母音の [u:] であれば、その方がいっそう適切である。

このようにして、引きの部分に「う」を当てることが正当化できるとしたら、そのあとに続く部分を「ぐひす」と聞き取ったことについて、もはや説明に苦しむ必要はない。したがって、「うぐひす」が擬声語起源であることは十分に可能であり、「す」を語末に持つところからみても、その蓋然性は極めて高

いと考えてよいであろう。ただし、それは、この語が成立した段階でのことであって、文献時代以後ももの語源意識が保持されつづけていたかどうかは極めて疑わしい。もし、その鳴き声が「うぐひす」という形でとらえられていたとするならば、季節の違いがあるだけで、ホトトギスと同様、その来訪を心待ちにされていたウグイスについても、「名告り鳴く」とか「名告る」とかいう表現が用いられていてもよさそうなのに、そういう実例が見あたらないからである。

鳴き声を忠実に模倣した形で口にする場合、「う」「ぐ」「ひ」「す」という四つの音節が、すべて等拍には実現されなかったであろうし、そのうえ、音素目録に含まれない音による修飾も加わったであろうが、鳥名として言われる場合には——すなわち、ことばとして整えられた形は——、すべて等拍に、そして、音韻体系に即した形をとっていたはずである。それによって擬声語と鳥名とは決定的に乖離し、後者はその語形をもって安定したが、前者は、その後、ほかの聞きなしの形となん度が交替して、現今の「ほうほげきょ」に至ったものと考えられる。なお、擬声語としての「うぐひす」は、鳴き声の全体を写したものであるから、鳥名としての「うぐひす」は、「ほととぎす」の場合と同じように、「うぐひすす」からの haplology によって導かれたものとみなすべきであろう。

第13節で紹介したように、亀井孝は、[p, t, k] というさえずりと「ひす」の部分とに「かすりの効果」を想定しているが、以上のように考えることが許されるとしたら、この和歌における表現技巧は、ウグイスの鳴き声を——おそらく語源意識を伴わずに——、鳥名の「うぐひす」に重ね合わせ、それに「憂く干ず」ということばとしての意味を引き当てたところにあると理解すべきことになる。その当時、ウグイスの鳴き声が一般にどのような形としてとらえられていたとしても——あるいは、社会的に通用する固定した形がなかったとしても——、「うぐひす」という語形自体は、本来、それが擬声語起源であるとしたら、作者が独自にそれを鳴き声に結び付けたとしても無理がないし、したがって、読者も自然な結び付けとしてそれを理解できたと考えてよいであろう。

## 16.

「うぐひすとのみ鳥の鳴くらむ」という表現における「うぐひす」の部分は、ウグイスの鳴き声をそのまま連想させるところの「うぐひす」という鳥名と、それを仮名連鎖のレヴェルにもどして意味を当てなおした「憂く干ず」との重



ね合わせになっていると解釈することによって、はじめて、いかにも『古今和歌集』を特徴づけるようなこの和歌の発想のおもしろさや表現技巧のすばらしさを正当に appreciate することができる。

ウグイスは「うくひす」と鳴きつづけている。その一つは、耳に聞こえるままに音を引き当てたところの、ことばとしての意味を伴わない鳴き声そのものであって、これは「うぐひす」であり、現今の「ほうほけきょ」に相当する。そして、もう一つは、仮名のレヴェルに引き戻してなんらかの意味をにやうはずの「うくひす」ということばである。しかし、それは鳥のことばであるから、しきりになにかを伝えようとして鳴いていても、それを人間のことばに翻訳しないと意味が通じない。ウグイスは、こんなに繰り返して鳴いて、いったい、なにを言いたいのだろうかと作者は考え、それを翻訳してみたところ、たいへん意外なことに、それは、「憂く干ず、すなわち、くいやだ、びしょ濡れで乾かない」という訴えであった。

自分から好きこのんで花から花へと飛び移り、ウメの花の、その香り高いしづくに身を存分にひたしているのだから、さぞかし嬉しがっているのだろうと思こんでいたのに、くいやだ、乾かないなどと鳴きつづけている、いったい、これはどういうつもりなのだろうというのが、この和歌の内容である。鳥のことばを翻訳することによってのぞいた新しい世界のその意外性ともいえるべきであろうか。そんな道理はないと思なおして、なんと耳を傾けてみても、やはり、ほかの鳴きかたはしていない、という確認の含みが助詞「のみ」にこめられており、また、期待に反する事態に対する驚きの感情が助動詞「らむ」によってよく表明されている。

隠題の「うぐひす」が、まったく隠されることなしに第1句に露出しており、内容的にもちぐはぐなようで、最初、いかにもつまらない物名歌としてしか映らなかったこの和歌も、ここまで分かってみるとなかなかの傑作であり、まさに巻頭を飾るにふさわしい出来ばえである。そのとらえかたは、A. Martinet の、いわゆる double articulation (二重分節) を逆方向から想起させるところがあっておもしろい。

物名歌の「うぐひす」の和歌も、誹諧歌の「ひとく、ひとく」の和歌も、ともに、ウグイスがことばを話しているものとみなし、そのことばの内容が意外であるとか心外であるとか言おうとしたものであって、両者の発想はたがいによく似かよっている。後者についての亀井孝による解釈は、誹諧歌としての意味づけとして正しい方向を持ち、また、導かれた帰結も基本的に有効であると

考えられる。ただし、「ひとく」を小鳥のさえずり一般をさすところの [p・t・k] と結び付けてしまうと、たくさんの種類の小鳥が、いつでも、「人来、人来」といって人間の近づくのを嫌っていることになりそうでもあるので——事実としては嫌っているに相違ないであろうが——この場合、それをウグイスだけによって話されることばとして——すなわち、「ほうほけきょ」という特有の鳴き声だけに結び付けて——、解釈することに無理がないとしたら、その方が、この和歌の内容にいつそうふさわしいのではないかと考えられる。小論の筆者としては、この「ひとく」を、「ほけきょ」に相当する部分とみなしておきたい。それに先行する引きの部分は、「ひとく」への導入であって意味をになわなないと考えてよい。急に人が現われたので、ウグイスがあわててどもったとみなせば、誹諧歌としてなおさらおもしろいそうであるが、そこまでいうのは穿ちすぎであろうか。

発想の共通性ということで注目したいのは、つぎの和歌である。「うぐひす」の和歌のすぐあとに並べられたもので、同じく藤原敏行の作である。和歌に好んで詠まれる鳥の名を隠題としている点においても変わりがない。

ほととぎす

(藤原敏行朝臣)

くへきほと　ときすきぬれや　まちわひて　なくなるこゑの

ひとをとよむる　【物名・423】

初めの2句は、「来べき程、時過ぎぬれや」という意味であり、その中に「ほととぎす」が詠みこまれている。ホトトギスは、なんといって鳴いているのであろうか、という疑問がまずあって、それを、「程、時過ぎぬ」と解いたのがこの和歌である。「ほととぎす」だけできっちり収まらずに、「過ぎぬれや」と、はみ出してしまっているが、所詮、「ほととぎす」という仮名連鎖を「憂く干す」の場合と同じように、意味のあることばとして再構成することができなかつたら、これは巧みな引き当てというべきである。撰者としては、「うぐひす」と「ほととぎす」との2首を不可分の対としてここにあげていると考えられる。

## 17.

「うぐひすとのみ」という隠題の詠みこみかたは、いかにも芸がないようにみえるという旨を第5節に述べたが、そのような批評は完全に撤回を要求されることになった。ただし、ここにおいて、われわれは、たいへん大きな問題の存在に気づかざるをえない。それは、注釈書の功罪ということである。

われわれは、注釈書から計り知れないほどの恩恵をこうむっているが、その事実を十二分に認めたいうえであえていうならば、一方、それらによって、せつかくの考える楽しみを奪われている場合が少なくないこともまた同様に事実である。『古今和歌集』の和歌においては、そういう弊害が特に著しいといわざるをえない。

「うぐひす」の和歌の作者は、「憂く干ず」という引き当てを、それぞれの読者が、みずから考えることによって導き出すようにと期待していたはずである。その過程を踏まなければ、独自の発想のおもしろさは味わうことができない。いわば、これは、読者に膝を叩かせようという趣向の和歌なのである。しかし、それにもかかわらず、作者によって意図されたとおりの手順を忠実に踏んで、「憂く干ず」という正解に到達し、この和歌をほんとうに読み味わうことのできた人は、はたして、どれほどいるものであろうか。現今についていえば——それと同じ状態は、ずっと古い時期まで遡るはずであるが——、絶無に近いといってよいであろう、小論の筆者もまた、その例外ではない。注釈書に頼らずに、すべての人たちが「憂く干ず」に到達できるかどうかについては確信が持てないが、ことばを愛し、表現を愛する人たちなら、その苦勞に比例するだけの知的な喜びを満喫することができたはずである。「うめ」や「ほととぎす」などの和歌に関しても、その原理は共通しているし、誹諧歌もまた同様である。

独自の発想のもとに、洗練された表現法を駆使して入念に組み立てられたこの種の和歌の中には、同時期の人たちにとっても、慎重な解きほぐしの過程を経て、はじめて、作者の意図を汲み取りうるものが少なからずあったと考えてよい。頭を使って構成された表現を、頭を使って解きほぐしていくその過程にこそ、和歌を読み味わう楽しみがあったはずであり、現在のわれわれもまた、その権利を奪われるべき理由はない。

藤原定家自筆の伊達本においては、「うぐひす」および「うめ」の和歌について、それぞれの仮名連鎖に、《上平上平》および《上平》の声点を加えられている。「す」の仮名の平声点は複点なので濁音を表わしている。

「うぐひす」の和歌では、「しづくに」「ひず」「なく」のそれぞれの切れ目の最初に語頭専用の仮名字母が用いられており、特にその「ひ」の字母は、この部分を「うく＝ひず」と切って読ませるために有効に機能している。

「うめ」の和歌では、「あな」を大きく、そして太く書くことによって、それがひとまとまりの単位であることを明示し、また、〈かおり〉の意の「か」は一

音節語なので、特にその仮名が目だつ形で書かれている。すみずみまで心にくいばかりの神経が行き届いているので、散文の場合であれば、無条件で賛嘆するところである。

われわれは、13世紀の語調に精通していないために、ここに加えられた声点をみても、隠題の詠みこまれているのがどの部分であるかを知るにすぎないが、当時の人たちであれば、自分自身の発音と照合して、「憂く干ず」および「あな憂、目に」という意味をほとんど反射的に読み取ることができたはずである。藤原定家は、表記上のこのような工夫によって、誤読や誤解の生じる可能性を完全に封じること成功したが、視点を変えるなら、こういう処置を講じることによって、読者が自分自身で考える楽しみをもまた奪ってしまったことになる。たとえていうなら、これでは、 $3x=6$  という計算問題が、 $3 \times 2=6$  という式で提示されているようなものである。その意味において、現今の某々叢書や某々文庫のたぐいの本文も、これとまったく軌を一にしている。漢字をあて、濁点を施し、文法的な切れ続きを示す、といった校訂作業が、結果からみると、悪女の深なさけになってしまっていることを、校訂者も読者も明確に認識しなければならない。われわれは、たとえば高野切に見られるような——それでさえ、連綿による解釈の提示が多く含まれているが——、草仮名がきのレヴェルにもどしなおして、みずから新たな解釈を試みない限り、それらの和歌をほんとうに読み味わうことができない。

## 18.

自力による解釈をその限界まで推し進めたるうえで、はじめて注釈書を参看するのが、小論の筆者なりの方法であるむねを第1節に述べたが、このあたりが、どうやら、しおどきのようである。小論において考察の対象としてきた二つの和歌については、説明に繁簡の差はあるものの、基本的な点における解釈のゆれが認められないようである。ここには、すべての注釈書を代表させて、本居宣長の『古今集遠鏡』に示された「俗言」による「訳」を示しておく。

○オノガ心カラ スキデ 花ノ雫ニヌレナガラ ツライコトヂヤ 乾カスト云テ 鶯ノヒタスラのみ アノヤウニ ナクノハ ドウ云コトヤラ

○梅ノ花ハ ヤレヤレ ウイ物ヤ マモノウ散テシマイサウデ 目ニ常往見ラレサウニモ見エヌ事カナ ソノクセアトデ 恋シカリサウナ香ハヨウニホウテサ

この「訳」のありかたについても、細かくあげつらえば際限がないが、いま

はそれらのすべてに目をつぶることにして、それぞれを、この小論においてわれわれが導き出した解釈に比較すると——それとても、まだまだ遺漏だらけに相違ないであろうが——、砂を噛むような思いを禁じえない。

## 19.

論述の都合上、あとまわしになったが、「うくひす」の和歌に関しては、それと関連して考察すべきつぎの1首がある。

(題しらず)

詠人しらず

われのみや よをうくひすと なきわびむ ひとのこころの

はなとちりなは 【恋 5, 798】

この第2句は、普通、「世を鶯と」と読まれ、「うくひす」の「う」に「憂」をひびかせたものと解釈されている。そうだとしたら、つぎの和歌とちょうど同じ手法がとられていることになる。

(題しらず)

喜撰法師

我が庵は都のたつみ しかぞすむ 世を宇治山と人は言ふなり

【雑下, 983】

第4句の「世を宇治山と」においては、「世を憂」までしか言われていないので、「憂し」の活用語尾は補って読み取るしくみになっている。それに対して、「世をうくひす」の場合には、「う」だけでなしに「うく」、すなわち、「憂く」までを続けて読んで、〈世を憂く思つて〉という意味に理解することが可能である。一部の注釈書には、そういう立場をとっているものもある。その線で解釈するならば、上の句は、〈わたしだけが一方的につらい思いをして、ウグイスと同じように、「うくひす」と寂しく泣くことになるでしょう〉ということになる。もしそうだとしたら、助詞「と」の使われかたからみて、この場合にも、ウグイスは、「うくひす」という仮名連鎖で表記される形で鳴っていることになるが、「ひす」の部分に「干す」という意味を引き当てて読んでよいかどうかとなると、いささかためらいを感じざるをえない。「泣きわびむ」への続きかたからするならば、〈涙のために袖が乾かない〉という解釈は自然であるが、ここでは、「憂く」を導くために「うくひす」が引き合いに出されただけであって、ウグイス自身は、意味のあることばで鳴っているわけではないとみておくのが穏当のようである。ただし、ここに、「うくひすとなき(鳴き・泣き)わびむ」という言いかたがされていることは、鳥名とその鳴き声との一致を示唆するものとして注目に値するであろう。

この和歌が、「うくひす」を意図的に詠みこんだものであることに疑いはないが、和歌それ自体の主題は恋の苦しみであり、この歌集でも物名歌としてでなしに、恋部に収録されている。第2節に引用した「いま来むと」[恋5・771]の和歌の場合と、部立の原理は共通しているといつてよい。「うくひす」を隠題とする物名歌としては、内容のうえからいって、さきに取り上げた作【物名・422】の方が明らかに正統である。

上述のように、従来の注釈においては、この和歌の修辞技巧を「世を憂く」という程度にしか認めてこなかったが、この場合にも、やはり、ウグイスが「うくひす」と仮名表記される形で鳴いているとみてよいとしたら、当然、物名歌の「うくひす」の和歌との系譜関係が問題にされなければならない。一つの可能性として、たがいに独立の思いつきであるという場合もありえないわけではないが、その蓋然性は極めて低いとみなければならない。恋歌の方を甲歌とし、物名歌の方を乙歌とするなら、甲歌は「詠人しらず」であり、乙歌は藤原敏行の作であるから、一般的なありかたからみて——もとより、その原理の無批判な適用は嚴重に警戒すべきであるが——、甲歌の方が先行するとみなすことは、ただそれが自然であるというにとどまらず、ウグイスの鳴き声に、ことばとしての意味を賦与することによって、積極的にももしろみを出そうとしている点においても、乙歌の方がいっそう sophisticated されたものになっているから、両者の先後関係が逆転することは、まず、ありえないであろう。甲歌を踏まえて乙歌が作られたとすると、第16節において指摘したところの、藤原敏行による表現の獨創性は著しく減殺されてしまいそうでもあるが、決してそのように考える必要はない。ウグイスの鳴き声をことばに翻訳し、意外性をもって構成したその非凡さは、甲歌を踏まえて作られたという事実によって、いささかも損なわれるものではなく、むしろ、同工異曲の域を超えたその飛躍こそが高く評価されて然るべきであろう。

なお、参考のために、この甲歌についても、『古今集遠鏡』の「訳」をあげておく。現今の諸注釈は、基本的にみて、おおむねこの線を踏襲し、あるいは、それに一致しているといつてよいようにみえる。

○五花ノチツテシマウタヤウニ 四ツソウ人ノ心ガカハツテ ノイテシマウタナラバ ニウイ事ヤツライ事ヤト思フテ 一相手ナシニワシヒトリ  
鶯ノナクヤウニ泣テ居ルデミアラウヤカ

解釈上のいちばんの問題点は、「鶯ノナクヤウニ泣テ居ル」という部分にある。

参 照 文 献

亀井 孝：春鶯囀（亀井孝論文集3，吉川弘文館，1984年）

亀井 孝：すずめしうしう（同上所収）

亀井 孝：梅咲きぬ どれがむめやら うめじややら（国語と国文学，1984年3月）

小松英雄：日本語の音韻（日本語の世界7，中央公論社，1984年）

〔付記〕 第12節の一部について、谷脇理史氏の御教示をいただいた。

〔初校に際して〕

印刷の都合で、国際音声字母と字形の正確に一致しない活字を使用した部分がある。